



TITLE:

# 排マルクス説の新刊書一二について

AUTHOR(S):

河上, 肇

---

CITATION:

河上, 肇. 排マルクス説の新刊書一二について. 経済論叢 1922, 15(5): 783-789

ISSUE DATE:

1922-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127956>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五卷 第五號

大正十一年十一月一日發行

## 論叢

交通税の長短 . . . . . 法學博士 神戸 正雄

傳統派の社會連帶思想 . . . . . 文學博士 米田 庄太郎

社會哲學<sup>に於ける</sup>の主意的二元論的思想 . . . . . 法學士 恒 藤 恭

經濟道と經濟術 . . . . . 法學士 作田 莊一

## 時論

我國の人口對食糧問題 . . . . . 法學博士 山本美越乃

食料品市場問題 . . . . . 法學博士 河田 嗣郎

## 資料

金輸出解禁問題 . . . . . 法學博士 戸田 海市

## 雜錄

戰爭と道德の原則 . . . . . 法學博士 財部 靜治

物價引下策と抽籤景品附賣買 . . . . . 法學博士 小川郷太郎

排マルクス說の新刊書一二について . . . . . 法學博士 河 上 肇

日銀兌換券發行高の季節的變動 . . . . . 法學士 沙見 三郎

## 排マルクス説の新刊書

### 一二について

河上 肇

#### (その一)

近頃教授ドゥティーなる人の社會主義に關する新著 (Doughty' Socialism and the Average Man, 1922.) を繙いたら、序文に次の如く述べてあつた。『既に信仰に固まつてゐる社會主義者に對し、有效な又は之を説き伏せるだけの訴を爲すことは、私の期待せぬところであり、又それは私の目的でもない。……社會主義に固まつてゐる人々にとつては、社會主義は宗教であり、信仰である。おまけに其れは理性よりも寧ろ情緒に其の根を下ろしてゐる信仰である。社會主義に固まつてゐる斯様な人々は、この書のうちに何等の興味をも亦た利益を見出さぬで

あらう。ところが幸にして、社會を構成してゐる大多數の人々は、未だ社會主義の信仰に固まつてゐない』。さうして其等大多數の人々のうち、或る少數の者は、十分に社會主義の短所を理解して居り、之に向つて理論的反對をなす能力を有つてゐるが、或者はたゞ本能的に之に反對し、また或者は——之が一番多數を占めてゐるが——社會主義について深い理解を有たない癖に、たゞ漠然と之に同情を寄せてゐる。そこで此の書は、後に擧げた二種の部類に屬する人々を相手に著はしたものである、云々。

私は此の序文を見て、自分などは著者から或は此の最後の部類に偏入されてゐるのかも知れぬと思つて、少しく本文を讀みかけた。ところが間もなく私は次の如き説明に出會つた。

『マルクスの根本命題は、勞働が——茲に勞働といふは筋肉勞働を意味する——富の唯一の生産者であるといふこと、及び之がコロラリーとして、勞働者は彼れの勞働の生産物の全部の價值に對して權利を有するといふこと

である。……………」<sup>1)</sup>

ドウティー教授の著書は『社會主義と素人』と題してあつて、經濟學の門外漢を専ら相手にする積りらしく見へるのだが、今日の日本では、經濟學の素人でも、普通の雜誌に眼を通してゐる位の人であつたなら、此のドウティーの解釋が根本的に間違つてゐることを、夙に知つてゐる筈である。私は大正七年<sup>2)</sup>にマルクスの『資本』その他から彼れの言葉を引用して、斯様なマルクス解釋の甚しく誤謬なることを述べたことがある。今重複を厭はず、重ねて之を引用するであらう。

マルクスが一八五八年に著した『經濟學批判』には次の如く述べてある。

『勞働は、使用價值を作り出すものとして觀察する限り、之を以て、その作り出すところの富、即ち物質的富の唯一の源なりと爲すは誤謬である』。

また有名なる『資本論』<sup>4)</sup>にも同じ意味のことが次の如く述べてある。

『反物、麻布、その他の使用價值、簡單に言はゞ商品の體は、自然の材料及び勞働といふ二個の要素の結果である。……………」されば勞働は決して其の生産するところの使用價值、即ち有形の富の唯一の源ではない』。

なほ一八七五年獨逸社會民主黨のゴータ綱領を批評したブラツケ宛の書簡<sup>5)</sup>では、ゴータ綱領が『勞働は一切の富及び文化の源である云々』と言つてゐるに對し、マルクスは明白に

『勞働は一切の富の源ではない。自然も亦た勞働と同じやうに……使用價值の源であり、而して國民の富は即ち此の使用價值より成るものである』。

と述べてゐる。繰り返し斯様に言つてゐるマルクスの根本命題が、どうして『勞働が富の唯一の生産者である』といふことに爲るのであらうか、教授ドウティーなる人が如何にマルクスに對し無智であるかは、たゞ此の一事で分かる。然らば私が茲まで讀んで來て後を棄て、仕まつたといふことは、決して不穩當ではあるまい。

1) p. 9.  
拙著『社會問題管見』215-226頁  
2) Zur Kritik der politischen Oekonomie, 2 Aufl. S. 13.  
3) Das Kapital, 1Bd., S. 9-10.  
4) Neue Zeit, IX Jahrgang, nr. 18, S. 563.  
5)

(その二)

私はまた近頃キリアムの『社會的史觀』(Maurice William, The Social Interpretation of History: A Refutation of the Marxian Economic Interpretation of History. 1921.)を題する著書を繙いた。この書の標題には『マルクスの經濟的史觀の論駁』といふ又書がある。それが私をして此の書を通讀するに至らしめた機縁である。勿論、マルクス説を批評せる著書論文は極めて多數であり、且つ益々その數を増しつゝあるに拘らず、前に掲げたドウティー流のものが多くて、讀んで利益を得るものは極めて少いことから、只この標題のみを以てしては、私をして或は之を讀了せしむるに至らなかつたであらう。ところが此の書の著者は『四分の一世紀以上に亘りマルクス派社會主義の徒として、マルクスの諸原理が科學及び社會進化の諸法則の上に基礎づけられてあるといふ主張に對し、限りなき信念をもつてゐた』人であり、『二十五年間、社會主義運動と密接な聯絡をもつてゐた』人である。

いふ點に於て、更にまた此の書は、著者が最初に『限りある私的出版物として、一九二〇年七月に始めて出し』『各種の色彩の社會主義者の批評によつて裨益せられんことを希望するがために、總ての派の著名な社會主義者に送つた』ものだといふ點に於て、即ち著者の閱歴と著述の態度に於て、頗る類書と其の選を殊にする所がある。それが私をして其の全部を通讀せしむるに至つた原因である。

それは通讀してさすがに損にならなかつた本である。同じ排マルクス説の書を読むならば、非社會主義者のそれよりも社會主義者のその方が増しであると云ふことは、此の場合にも當嵌まるやうに思はれる。しかし私は此のキリアムの議論が果して『マルクスの經濟的史觀の論駁』になつてゐるか否かを疑ふ。

先づ著者の所謂『社會的史觀』とは如何なるものであるかと云ふに、彼れの言ふ所によれば、『社會的史觀は、生存の問題を解決するための人間の努力が、歴史に於ける推進的動力である

といふ學説の上に基礎づけられてゐる』<sup>1)</sup>。詳しく言へば、『歴史上顯著なる諸現象の研究は、一切の社會的變動の背後に於ける推進的動力が、生存問題の解決に向つての探求である、といふ事實を明かにする。人間は滅亡の刑罰の下に、彼

れの精力を此の普遍的探求の上に集中することゝを、餘儀なくせられる。總て過去の歴史は、地上に於ける彼れの生存を確保せんがための彼れの努力に於て、彼れの出會つたところの、諸々の試み及び經驗の記録に外ならぬ。生さんとする意志、これが普遍的の經濟問題である』。こゝういふ主張が彼れの史觀の出發點だといふのだが、今改めて言ふまでもなく、さういふ譯ならば、彼れの所謂社會的史觀は飽くまで一の經濟的史觀であつて、それは彼れの排斥せんとするところのマルクスの史觀と、全く同じ前提の上に、その議論の基礎を置いてゐるのである。なほ彼は之に續いていふ。――

『總ての社會的進歩は、生産の方面に於ける利害の衝突の結果として生じたのではなく、

社會人としての多數者の共通の利益に應じて行はれた。社會的進化は常に此の普遍的法則に應じて働く。總ての社會的發達の目的及び目標は、生存問題の解決である。

『階級闘争は結果であつて、原因ではない。それは生存資料の不安固から起る。之が原因を排除することは、全體としての社會の利益である。

『社會が件の原因を排除するの努力に於て進めば進むほど、之が結果たる闘争は消え去る。

『消費者としての多數者の經濟的利益は、一致する、さうして社會は社會人及び消費者としての多數人の經濟的利益に應じて進歩する。

『……社會の或る形態に對する吟味の標準は、その生産力が社會の缺乏を充たす能力の如何にある。この吟味に應ずることに失敗すれば、その崩壊は避くべからざる運命である。そこには、或る特殊の要求を解決するにより適することを約束するところの、新たな

1) p. IX.

2) p. 76.

る生産力が漸次に發達する。全體としての社會は、その範圍に於て富むことになる。

『古き生産方法は新たなものに其の地位を譲らなければならぬ。かくて古き社會秩序は其れに特有な絞取の形態と共に排除されて仕まふ。新たな社會秩序は、多數者の社會的利益に應じて、古き社會秩序の胎内に發展する。多數者は、過去の遺物たり現在の無用物たる人々に對する、有力なる且つ有用なる人々の團結によつて、形成せらるゝを常とする。』

『けれども從來の社會秩序には、曾て絞取を已めたものは無い。社會の要求をより善く充すための手段として發達した新たな時代は、之と共に、古き時代の下で絞取されてゐた人々の解放を齎す。けれども此の群から復た、進歩した生産力を其の制御の下に置くところの、新たな支配階級が起る。さうして此の階級が今度は絞取するのである。進歩した生産方法は、新たな支配階級の絞取率をば、

それ自身が嘗て絞取されてゐた率よりも、遙に大ならしめる、之が社會發達の一の普遍的法則である。それにも拘らず、絞取される人々のより高き經濟的利益は、新時代の下に於て遙により安固なものになり、社會の地盤に於ける彼等の地位は、以前の時代に於ける被絞取階級の地位より、顯著な進歩をしたことになる。消費者として又社會人としての彼等の地位が改善されるといふことが、新たな時代の被絞取者をば彼等の絞取者に結び付け、かくて過去の遺物たり現在の無用物たる人々に對し多數者を形成するに至らしむる所以となる。

『社會内の總ての群は、社會人としての、又消費者としての彼等の經濟的利益に關し、互に利益を殊にするよりも、遙に多くの點に於て共通の利益を有する。だから社會の發達は主として消費者の利益に應じて行はれる。社會制度は生産方法の變化と共に變化する、しかし一の生産方法は其れが生存問題を解決す

ることに失敗するから變化することになるのである。

『……資本家的生産方法に對する眼前の歴史的脅威は、生産超過でなくて生産不足である。社會主義は消費者の運動によつて實現さるべく、生産者の運動によつて實現さるべきものではない。』

私は著者を不公平に取扱ふことの危険から免れるために、彼が其の著書全體の標題と同じ標題を附せる第八章の主要部分を殆んど逐字的に譯出したが、今之を通讀された讀者は、斯かる思想を支持する著者が何故マルクスを排斥しなければならぬかの理由をば、十分に把握することに、恐らく苦しまるゝであらうと、私は考へる。吾々がマルクスの唯物史觀を惡意か又は無智かによつて相當に歪めて考へない限り、吾々は著者の主張する史觀がマルクスの經濟的史觀の a refutation となる所以を解し得ない。マルクスによれば、人間の生きんとする意志、それが歴史の根本的推進力である。より多くの者が

より善く生きんとする努力の發現として、人類の歴史には、絶えざる生産力の増進、生産方法の改善、生産組織の變化、社會組織の推移が起ると言ふのである。キリアムが主張してゐる所と殆んど大差はない。『しからば、何處でマルクスは誤つてゐるのか?』キリアム自身が斯やうに質問して、更に自ら次の如く答へてゐる。『マルクスの誤謬は彼れの學説のうちに求むべきでなく、彼れの學説に對する彼れの解釋のうちに求むべきである。……マルクスは社會制度を説明する仕事に取掛つた。彼は成功した。社會制度が經濟的の基礎と説明とを有することを發見した名譽は、マルクスに屬する。しかし此等の發見の眞の意義は何であるか? 彼は社會が經濟的基礎を有すること、及び階級闘争が各時代の離すべからざる現象たることを發見することに於て、彼は社會進化の法則を發見したと考へた。けれども彼が發見し且つ微細に亘つて記述してゐる所のものは、社會進化の法則の作用の結果の表現に過ぎない。』



著者の説明は決して、つゞき、したものでは無  
い。『マルクスの誤謬は彼れの學說のうちに求  
むべきでなく、彼れの學說に對する彼れの解釋  
のうちに求むべきである』とは何の事か？彼れ  
の學說の中には求むべき誤謬がないに拘らず、  
何故著者はマルクスの學說の a refutation をな  
さねばならぬのか？文字の末について言へば、  
著者の説明は可なり不明瞭であるが、しかし  
全卷を通讀して見ると、要するに著者は、社會  
の諸階級は互に利益を殊にするよりも遙に多く  
共通の利益を有すと信ずる點に於て、マルクス  
と正反對の意見を有すと考へてゐるらしく思は  
れる。しかし若しさうであれば、それはマルク  
スの唯物史觀乃至階級闘爭說に對する甚しき誤  
謬を、著者自らが抱いてゐる證據である。

\* \* \*

マルクス自身が明かに其れは誤謬だと言つて  
ゐる思想を捉へて、マルクスの根本思想だと考  
へ、之が誤謬を明かにすることによつてマルク  
スを排斥し得たりと信じてゐるドウテイ一の如

き著者もあれば、またキリアムの如く大體に於  
て自らマルクスの經濟的史觀に立脚しながら、  
敢てマルクスの經濟的史觀を排斥すと號する著  
者もある。此の如くにして、マルクスに關する  
論著は出づること愈々多くして、彼れの學說は  
却て益々その真相を覆はれる。眞實を知らんと  
する者は、所詮元に戻らねばならない。